

講義等の内容

授業科目名	講義等の内容
健康科学特別講義	食・健康・栄養・リハビリテーションに関連する諸科学が目覚ましく進展し、これまで別々に発展してきた関連諸科学を統合し、新たな学問領域を形成しつつある。健康科学特別講義では複数の教授が分担してそれぞれの専門分野の動向を踏まえて、現状と課題について紹介し、注目されている内容について解説するとともに、これまで取り組んできた研究課題を概説することで、それぞれの専門分野における修士論文作成につなげていく。
健康科学研究法特論講義	健康科学分野に寄与できる研究テーマの選択、データ収集、統計処理など研究デザインに関する一連の方法、ならびにプレゼンテーションや修士論文執筆の方法などについて教授する。
健康科学研究法特論演習	「健康生活の番人」として、栄養学研究とリハビリテーション学研究の融合をコンセプトとして掲げていることより、研究結果の考察を進めていく上で各専門基礎分野の学問から導かれた科学的根拠をいかに明確に示していくかについて学習していく。
臨床栄養学特論 I	生体にとって摂取された栄養素がスムーズに代謝されるには、生体の酸・塩基平衡が確実に保たれていることが必須である。酸・塩基平衡は体液の緩衝系・呼吸調節機能、腎臓、などによって調節されているが、ことに小児では、そのバランスが簡単に障害される。ここでは、①体内代謝と酸の産生、②体液の緩衝作用と pH の調節、③体液 pH 調節の原理、④生体の酸・塩基平衡異常、⑤アシドーシス、⑥アルカローシス、⑦食事療法について実例を提示しながら講義を行い、食を中心にその対応を検討する。
臨床栄養学特論 II	近年、アレルギー疾患が急増している。その理由として①住環境の変化、②食環境の変化、③精神環境の変化、④体質の変化、などがあげられている。なかでも最も有力な仮説として、衛生仮説がある。住環境・食環境が以前と比較して極めて衛生的となり、感染症が少なくなったことが指摘されている。すなわち人の免疫の中で感染に対応する Th1 リンパ球が少なくなり、アレルギーを起こしやすい Th2 リンパ球が相対的に増えてきている。食環境を中心にしてこの問題について考え、検討してみたい。
食品学特論 I	食品について多面的な観点から学ぶ。栄養的意義、二次機能および三次機能について詳しく解説し、ヒトの健康と食品の持つ潜在的機能について学修する。食品学特論 I では食品成分の化学的なアプローチを中心に、食品の機能について最新の情報を提供し、高度な専門的知識を習得する。
食品学特論 II	食品について応用面の観点から学ぶ。貯蔵中や加工中の食品成分について詳しく解説し、食品の持つ潜在的機能とヒトへの応用について学修する。「食品学特論 II」では、最新の発酵の開発、食品バイオテクノロジーの基礎と技術、食品に関する英文雑誌を紹介し、最新の情報を提供する。

授業科目名	講義等の内容
生化学特論 I	タンパク質はあらゆる生命現象を司る基本的物質である。生体触媒、生体構造の保持、生体防御物質、情報伝達物質など多様な働きをしている。生化学の発展に伴い、代謝や合成・分解、制御機能などが分子レベルで解明されている。一方、アミノ酸はタンパク質合成の素材としての役割のほかに、化学構造や性質の特異性から固有の機能を示すとともに、タンパク質・アミノ酸の特性や機能を高度なレベルで、かつ栄養学的視点も取り入れて講義する。
生化学特論 II	「生化学特論 I」に続き、生理活性物質の特性・機能などに関する最近の知識を修得する。具体的には食品や体成分中の特異的な生理活性を示すペプチドを取り上げて、それらの単離・同定、合成、構造・機能相関、応用研究などを最近の英文雑誌を通して抄読する。酵素阻害、酸化抑制、抗菌作用などの生理活性を有するペプチドや関連物質が相次いで見出されると共に、機能性食品あるいは医薬品として実用化へ向けての展開が試みられている。これらについて学習し、英語論文の読解力も養成する。
栄養教育特論 I	栄養教育の目標は、人々の生活に関わる栄養（食事）、運動、休養、睡眠などの科学的な事実をもとにして、生涯を通じた健康の保持・増進、QOL(quality of life、生活の質)の向上に寄与する適切な食行動の習慣化を図ることにある。ここでは、メタボリックシンドローム、ロコモティブシンドローム、さらにセデンタリー・デス・シンドローム（座りすぎが死につながる症候群）の予防を目的とした健康教育・栄養教育について、わが国の栄養行政や最新の知見を交えながら概説する。また個人や地域、集団を対象とした栄養教育の場において、問題点の改善に活用できる行動科学的な理論・モデル及び行動修正技法についても修得し、生活習慣病の予防における栄養教育の役割を理解して、栄養アセスメント及び栄養教育計画を的確に実施できるスキルの修練も目指したい。
栄養教育特論 II	生活習慣病の予防には、遺伝、環境要因及び食生活を主とするライフスタイルなど、さまざまな要因が関連している。これらの要因と生活習慣病との関連についての疫学研究成果は、健康教育や栄養教育を計画・実践する際には、情報・資料として必須である。ここでは、栄養疫学の手法についての理解を深めることを目的に、栄養疫学、食環境、疾病予防に関する論文をとりあげ、科学的根拠のある情報を得る能力を養う。また栄養教育の行動科学理論や方法論、国内外の実践的な栄養教育プログラムに関する研究論文や研究報告書を調べて、そのプログラムの特徴と栄養教育効果についての発表を行ない、議論を交えて講義を進める。
薬理学特論 I	近年では、健康を疾病の対立概念としてよりも、積極的な健康への取り組みへの移行が求められている。このような健康の概念の変化は、栄養・食生活・運動は、多くの生活習慣病との関連が深く、また日々の中で QOL との関連も深い。薬理学は創薬・育薬などの薬物の疾病治療への応用を視野に入れ、薬物治療の基盤を確立する科学であると定義される。医療現場における栄養管理や指導、リハビリテーションでのチームアプローチを進める上で、基本的な医薬品や薬物療法の理解は必要な知識のひとつである。本講義では、薬物の体内動態および薬理作用を解説し、主な疾病に対する薬物療法について概説する。
薬理学特論 II	健康日本 21（第二次）の推進において、従来からの食生活の改善や運動習慣の定着等による一次予防に重点を置いた対策を推進するとともに、生活習慣病の発症予防とがん、循環器疾患、糖尿病および COPD（慢性閉塞性肺疾患）などの NCD（非感染性疾患）の合併症の発症や症状の進展などの重症化の予防に重点を置いた対策を推進すべきであると提言している。「薬理学特論 II」では、生活習慣病や NCD 疾患における薬物治療の概略とそれに必要な医薬品の作用および薬理作用、副作用について概説する。

授業科目名	講義等の内容
食品加工学特論Ⅰ	動物性食品の特徴とその加工食品について解説する。「食品加工学特論Ⅰ」では動物性食品、特に牛乳・乳製品及び食肉製品を中心にそれらの原料の理化学的特性や嗜好的特性及びそれらの加工プロセスによる品質変化について深く探求する。具体的には乳及び肉製品に関して、機能性成分、近年の科学的、技術的動向や課題などについて深く理解させる。
食品加工学特論Ⅱ	我々の食生活は豊かになり、食環境の多様化や、複雑化、あるいは国際化によって生産・加工・流通・保存・貯蔵の技術は目覚しく進歩してきた。「食品加工学特論Ⅱ」では食品の加工及び貯蔵についての専門知識を高め、食品学を究める学生の資質の向上を図る。具体的には、食卵の科学、いくつかの食品の加工・貯蔵に関わる基礎的な特性を理解し、加工との関連を考察する。最新の研究も紹介する。
解剖生理学特論Ⅰ	ヒトの体の成り立ちを根本から理解するために、ヒトが一種の動物であるという観点から、そのボディープランを比較解剖学的、比較発生学的に学んでいく。脊椎動物の基本体制を学びながら骨格系、神経系、そして内臓がいかにして現在のヒトにおける体制をとるようになったかを考察していく。機能的には神経を中心に学ぶが、脳と脳神経、脊髄と脊髄神経、および自律神経を学ぶ。脳神経はそれぞれ個性的な役割をもつし、脊髄神経は上肢下肢の支配に大きな働きをする。また、末梢神経の再生についても、それがどのような現象なのか、メカニズムについて考察する。
解剖生理学特論Ⅱ	「食べる」行為は口腔に始まり、そのメカニズムを深く理解するためには頭頸部についての医学歯学的な基礎知識が必要である。そもそもヒトの頭部形成には鰓弓が大きく関わるが、鰓弓を理解すると鰓弓に由来する構造物や脳神経も同時に理解することができる。例えば神経では三叉神経、顔面神経、舌咽神経、迷走神経の分布と機能についての理解である。それに加えて頭頸部の自律神経を学べば、咀嚼、嚥下、味覚といった、「食べる」行為のメカニズムに迫っていくことができる。「解剖生理学特論Ⅱ」では「解剖生理学特論Ⅰ」で学んだ基礎知識の上に「食べる」ことについて解剖学的生理学的な内容を積み上げていく。

授業科目名	講義等の内容
リハビリテーション学 特論 I	<p>リハビリテーションの概念は大きく変化し、今や単に障害に対する治療・訓練というものではなく、いかに高度に進歩した臓器別専門治療を提供し、年老いても障害をもちながらも、住み慣れたところで安心して自分らしく暮らせるように具現化をすることである。</p> <p>今日のリハビリテーションの最終目標は、安全で質の高い生活の保障であり、理学療法士・作業療法士は健康づくりから疾病予防、そして救急治療から地域生活に至るまで、多職種と共に質の高い医療・介護サービスが提供し、心豊かに安心して暮らしていける地域づくりに寄与しなければならない。ひとは足で歩き、手でさまざまな道具を使い行為を行っている。足と手の機能もその目的遂行のより進化、発達してきた。そしてひとを取り巻く生活環境はその機能に合わせて創り出されてきたとも言える。そのため、何かの原因で本来の機能が障害された場合、さまざまな問題が生じてくる。その問題発生の予防、あるいは解決こそがリハビリテーションの課題となる。こうした観点から「生活支援」という言葉をキーワードとして、地域で人間らしく生きることについて考える。</p>
リハビリテーション学 特論 II	<p>今日、リハビリテーションの対象となる患者は、急性期から維持期（慢性期）まで、あるいは新生児から高齢者まで、あらゆる疾患とあらゆる年齢階層に渡っており、その多くがなんらかの栄養障害を呈している。そこでまず、このような栄養障害がなぜ起こり得るのか、疾患・障害と栄養障害との因果関係をみる。次に、これから離床し、積極的なリハビリテーションを施行される患者に対して、体力や筋力を効率的に改善させ日常生活動作の向上を図るためには、どのような栄養素がどの程度必要であるのか、或いは逆に栄養不足により運動や活動にどのような影響が出てくるのかを調べる。例えば、患者の一日の活動水準の違いによりエネルギー所要量が異なるが、激しい運動を行う場合は糖質と脂質が十分に補充されなければならない。運動すると筋肉は肥大するが、効率よく筋力を付けるためには十分なタンパク質が必要である。また、カルシウムは筋肉の収縮に不可欠であり、不足すると運動中に筋痙攣を起こしたりすることがあるなど、運動中の事故を予防し、効率よく運動を継続するためにもこのような知識を修得することは重要である。疾患固有の栄養障害を知り、栄養障害が運動に及ぼす影響について学習する。</p>
健康運動機能特論 I	<p>健康を前提とする運動機能には日常生活活動を維持あるいは遂行するための能力である体力が強く関連する。これには防衛的、行動的体力としての身体抵抗力、免疫能や運動などの概念が含まれるが、特に運動に関して必要となるエネルギー源は食物からの栄養補給に依存している。日常生活での健康を維持あるいは増進させるための健康づくりには食事と運動のバランスをいかに適切に保つことができるかが基本的原則となる。臨床では低栄養状態にある対象者や高齢者を対象とする際のリハビリテーションにおいて栄養管理に伴う合併症予防や早期回復を促進するための栄養サポートチームによる介入の重要性が認識されつつある。当然、これら対象者の治療に携わる理学療法士・作業療法士にも栄養管理に関わる高度な知識や技術が求められる。この領域では健康づくりのための「食と運動との関連性」、「運動とエネルギー代謝」や「栄養管理の重要性」、「身体と栄養」等について学ぶ。</p>
健康運動機能特論 II	<p>健康とは、身体的能力だけでなく、社会的・個人的な面での資源という点を重視した前向きな考え方である。高齢社会において健康寿命の延伸がいわれ、日々の生活環境にうまく対処する手段として、健康づくり（ヘルスプロモーション）が強調されているところである。ヘルスプロモーションとは、人々が自らの健康をさらにうまくコントロールし、改善していけるようになるプロセスであり、ただ保健医療部門にゆだねられる責務というよりは、健康的なライフスタイルをさらに越えて、幸福（well-being）にまで及ぶものである。人が身体的、精神的、社会的に健全な状態に到達するには、個々人や集団が、望みを明確にし、それを実現し、ニーズを満たし、環境を変え、それにうまく対処していくことができなければならない。介護予防事業等における効果的で、継続性のある運動、口腔、栄養等に関するプログラムの検討やその成果の検証を行なう。</p>

授 業 科 目 名	講 義 等 の 内 容
自律神経障害支援特論 I	<p>リハビリテーションの対象には脊髄損傷や筋委縮性側索硬化症などの神経・筋疾患、心機能・呼吸機能の障害を有する内部疾患など、運動障害だけでなく自律神経障害を有する疾患も多い。自律神経は血圧や呼吸の調整を行うことから運動負荷時の呼吸・循環反応は運動療法の治療方法やその効果の判断指標として用いることが可能である。長期臥床者や頸髄損傷者の起立性低血圧、心疾患患者の不整脈、呼吸器疾患患者の呼吸リズムのコントロールなど、自律神経障害を理学療法で改善できるか？などの課題も抱えている。これらの疾患では肥満やるい瘦がみられ、栄養状態の良否が運動機能に影響を与えている可能性がいわれており、呼吸器疾患では栄養状態の維持が課題となっている。本講座は心電図から自律神経活動を分析し、理学療法の効果判定や自律神経障害そのものの改善の可否を検討するものである。</p>
自律神経障害支援特論 II	<p>自律神経は疾患によっては自律神経系そのものが障害されるが、直接に障害を受けなくても運動器や呼吸・循環器、消化器など、ヒトの持つ機能の全てに影響を与えると同時にそれら各機能の変化を受けて活動も変化する。本講座では姿勢の変化や運動負荷の相違、栄養摂取の違い、外部刺激の条件変化などによって自律神経活動がどのように変化するか？を主目的として演習を中心に開講する。手法として心電図から心拍揺らぎを測定し、R-R 間隔の周波数解析から交感・副交感神経系の活動を分析する。演習では心電図の計測方法の理解と実践、周波数解析とデータの解釈と統合など、健康づくりの効果指標・方法の検討を行う。</p>
地域活動支援特論 I	<p>リハビリテーションは、障害のある方や高齢者（対象者）が、期待される最良の心身の状況を獲得し、年齢や障害の程度に応じ、その地域に住む方々と、社会的・教育的・職業的・経済的・文化的に同程度の水準の生活がなされるように支援することである。そのための地域リハビリテーション活動支援技術として、以下について演習・育成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 評価およびニーズ把握と支援技術の分析 対象とする個人・集団の医学面と生活面の両面からの評価およびニーズ把握により、生活支援に必要なリハビリテーション技術の抽出能力を育成する。 2. 生活の場の診断と課題分析 対象とする個人・集団が生活する「場」について、生活環境アセスメント、社会資源アセスメント、制度や介護・福祉サービス等の把握および課題の分析方法を育成する。 3. 活動支援と生活の場とを統合する技術 対象者に期待される心身の状況を支援する専門職を含む住民の形成と、生活を継続する統合機能を育成する。
地域活動支援特論 II	<p>わが国は急速な高齢化に伴い、要介護高齢者や認知症高齢者が増加しており、早期診断の推進と適切なリハビリテーション・ケアの研究開発と普及、家族支援を含めた地域社会生活支援体制の構築などの高齢者・認知症対策が急務となっている。</p> <p>本授業科目前半では、認知症の中核症状である認知機能障害や BPSD、生活機能障害、QOL のアセスメントとリハビリテーション、環境整備のあり方について、現状の実践とエビデンスの確立状況を講義する。授業後半では、認知症に主要な精神疾患である統合失調症、うつ病も対象として加え、認知機能、ストレス、アセスメント、リハビリテーション、予防、家族支援、ケア、介護などをキーワードとして、先行研究レビューを主とした演習を行い、今後の研究課題および方向性について明らかにする。</p>

授 業 科 目 名	講 義 等 の 内 容
環境健康生活特論 I	<p>心身機能の多様な障害は健康生活遂行の阻害要素となり、障害を持つ者の生活に多様な障害を惹起する。また、生活障害の現れ方・感じ方は、年齢・性別、生活歴、物理的・社会的な生活環境の違い等により各人各様であり日常における生活動作の遂行から主体的な社会参加までの幅広い生活行為において定型化されるものではない。このため多様な生活障害の評価とその改善のための企画立案はクライアント個別の価値観に対応した支援が求められる。そのため、個別の障がい者の支援については、主体者を支援するという支援理念に基づいた技術面からの多面的かつ具体的な解決策の提案が必要である。ADL や APDL に代表される生活行為の方法の適切な選択や新たな開発が求められ、それらに対応する自助具・福祉用具の開発、家屋改造等の環境調整、ニーズに応じた移動手段の獲得や開発、ノーマライゼーションを保障するまち作り等について幅広く学習する。</p>
環境健康生活特論 II	<p>障害者や高齢者の生活環境について、在宅生活を支える様々な社会サービスを理解するとともに、住環境整備に対する法的制度（介護保険制度）、高齢者や障害者の身体的・心理的特性の理解、疾病別・障害別の住環境整備のあり方などを学ぶ。さらに、住環境整備の共通基本技術として、手すりの取り付けや段差の解消、福祉用具の活用などを学ぶ。演習課題として、事例を通して住宅改修における見取り図作成や福祉用具の製作を行い、生活支援のあり方を検討していく。講義形式にとらわれず、症例検討を中心に住環境整備のあり方を提示していく。</p> <p>その他の課題として、フィンランドとオーストラリアの福祉施策の実情を紹介し、わが国の福祉施策との対比の中より、今後の高齢社会における我が国の取り組みについて議論を交えていく。</p>

* 「健康科学研究法特論講義」「健康科学研究法特論演習」についてはそれぞれ小倉北区キャンパス、小倉南区キャンパスにおける教員が担当する。また、「特別研究Ⅰ」「特別研究Ⅱ」についてはそれぞれの学生の修士論文指導教員が担当する。

授 業 科 目 名		健康科学特別講義	
担 当 者 名		橋元 隆 ・ 喜多 大三 ・ 高橋 精一郎 ・ 原 研治 ・ 杉元 康志	
科 目 コ ー ド	1900021	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	通年
単 位 数	4 (前期 2 ・ 後期 2)	履 修 方 法	必修
授業の概要と方法	健康科学特別講義ではオムニバス形式で、「食」と「リハビリテーション」の観点から、健康をテーマに各専門分野での現状と課題について講義する。 授業の担当は、1～3, 16～18 (原)、4～6,19～21 (橋元) 7～9,22～24 (杉元)、10～12,25～27 (喜多)、13～15,28～30 (高橋) である。		
授業の到達目標	・健康科学分野における「食」と「リハビリテーション」の専門知識および研究方法などを習得する。		
授 業 計 画			
1.	タンパク質の選別輸送 (原)	16.	タンパク質の構造 (原)
2.	タンパク質のプロセッシング (原)	17.	タンパク質のプロテオーム解析 (原)
3.	リソゾーム酵素の役割と疾病 (原)	18.	遺伝子クローニング及びタンパク質発現系の構築 (原)
4.	高齢者の身体特性と疾病の特徴 (橋元)	19.	北九州市における介護予防事業 (橋元)
5.	介護予防と健康づくりの現状 (橋元)	20.	認知症に対する新オレンジプラン (橋元)
6.	食と運動による健康づくり (橋元)	21.	私たちが取り組んでいる健康づくり (橋元)
7.	アミノ酸のアミノ基転移反応 (杉元)	22.	実験方法について① (杉元)
8.	アミノ基転移反応の役割 (杉元)	23.	実験方法について② (杉元)
9.	アミノ基転移酵素の関与する疾病 (杉元)	24.	実験方法について③ (杉元)
10.	陰陽・五行説について (喜多)	25.	ファイトケミカルとは (喜多)
11.	食材の自然属性について (喜多)	26.	ファイトケミカルの効能 (喜多)
12.	食材の中医学的効能について (喜多)	27.	ファイトケミカルの論文抄読 (喜多)
13.	年齢と自律神経活動を考える (高橋)	28.	循環器疾患の自律神経活動を考える (高橋)
14.	姿勢と自律神経活動を考える (高橋)	29.	呼吸器疾患の自律神経活動を考える (高橋)
15.	荷重と自律神経活動を考える (高橋)	30.	代謝疾患の自律神経活動を考える (高橋)
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
レポート	授業に向けての予習		
80%	20%		
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
1) 担当教員は、次の授業までに行うべき予習・復習について指示します。 2) 論文抄読は、関連論文や参考書など利用して論文内容の予習しておくこと。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・担当教員による講義資料を配布			
参考書又は参考資料等			
・担当教員の推薦参考書。			
そ の 他 (受講生への要望等)			
・質問等のある場合は、各担当教員のオフィスアワーの時間で対応することになっているので、講義の前後若しくはメール等で事前に担当教員に連絡下さい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail		その他	
hashimoto@knwu.ac.jp (橋元)	s-takahashi@knwu.ac.jp (高橋)	質問等は、水・木曜日 16時20～17時00分の時間帯のオフィスアワーで小倉北区キャンパス 2号館 708室で対応します。(喜多担当分)。	
kita@knwu.ac.jp (喜多)	yasushi@knwu.ac.jp (杉元)		
hara-k@knwu.ac.jp (原)			

授 業 科 目 名		健康科学研究法特論講義	
担 当 者 名		喜多 大三 ・ 奥村 チカ子 ・ 池本 美智子	
科 目 コ ー ド	1900022	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	必修
授業の概要と方法	健康科学分野に寄与できる研究テーマの選択、データ収集、統計処理など研究デザインに関する一連の方法、ならびにプレゼンテーションや修士論文執筆の方法などについて教授する。 小倉北区キャンパス授業担当：喜多・池本 小倉南区キャンパス授業担当：奥村		
授業の到達目標	1) 健康科学分野に寄与できる研究のテーマ選択およびデザインを習得する。 2) データの収集方法、それらの統計的な解析法などを学習し、修士論文の執筆・発表方法などを習得する。		
授 業 計 画			
1.	研究法特論概要・文献検索方法 図書館・蔵書検索・文献検索利用ガイダンス		
2.	総論 健康科学の研究方法、実践研究の意義と必要性、科学的根拠に基づく実践		
3.	各論 調査研究の方法、調査研究の記録		
4.	質問紙票調査法① 質問紙票の作成と実施の方法、自記式、面接法、インタビュー法		
5.	質問紙票調査法② 量的データと質的データ、質問紙票作成		
6.	調査研究の実際① 調査(事例研究)の実施、データの収集、統計手法の活用方法		
7.	調査研究の実際② 記述統計、質的データの分析		
8.	調査研究の実際③ 調査(事例研究)のまとめ方、実践活動への適応性		
9.	研究のあり方、研究における倫理、本学の倫理規定、倫理委員会について 健康について、健康科学に関する模擬研究テーマ選択		
10.	健康と生活習慣病について① 模擬研究のデザインの作成		
11.	健康と生活習慣病について② 模擬研究のデータ収集①		
12.	健康と生活習慣病について③ 模擬研究のデータ取集②		
13.	健康科学関連論文の抄読、 模擬研究のデータの分析と考察		
14.	健康と食べ物について、 模擬研究発表内容とスライド等の作成		
15.	健康科学に関する模擬研究の発表とまとめ		
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
模擬論文	論文発表		
80%	20%		
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
1) 模擬論文の課題については、指導教員とディスカス後決定し、講義資料や参考書など利用して模擬論文を作成する。 2) 模擬論文については、本講義で論文内容を発表する。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参考書又は参考資料等			
・ 講義資料については、講義毎に配布する。			
そ の 他 (受講生への要望等)			
1) 授業内容について理解できない箇所がある場合は、講義やオフィスアワー時に質問にしてください。 2) レポートを課した場合は、提出期限を厳守して下さい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail		その他	
kita@knwu.ac.jp (喜多)	ikemoto@knwu.ac.jp (池本)	質問等は、水・木曜日 16時20～17時00分の時間帯の オフィスアワーで小倉北区キャンパス 2号館 708室で対 応します。(喜多担当分)。	
okumura@knwu.ac.jp (奥村)			

授 業 科 目 名	健康科学研究法特論演習（小倉北区キャンパス）		
担 当 者 名	大澤 得二・杉元 康志		
科 目 コ ー ド	1900023	授 業 形 態	演習
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	1	履 修 方 法	必修
授業の概要と方法	代表的な生化学および解剖生理学的な研究手法を学び、自らの修士論文研究を遂行するにあたり役立つ技術を習得する。		
授業の到達目標	① 有機物の分離・定量ができるようになる。 ② 蛋白質の分離・定量ができるようになる。 ③ 酵素活性の測定ができるようになる。 ④ 顕微鏡観察のための試料作成の過程を習得する。		
授 業 計 画			
1.	有機物の分離①		
2.	有機物の分離②まとめ		
3.	HPLC による分離定量		
4.	蛋白質の分離①		
5.	蛋白質の定量②まとめ		
6.	酵素活性の測定法①		
7.	酵素活性の測定法②まとめ		
8.	試料作成法①固定		
9.	試料作成法②脱水～包埋		
10.	試料作成法③切片作成		
11.	試料作成法④染色		
12.	顕微鏡観察法①		
13.	顕微鏡観察法②		
14.	顕微鏡観察法③		
15.	顕微鏡観察法④		
成績評価の方法 【評価項目と割合】			
レポート			
100%			
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・各回の講義にて、事後学修等について連絡をします。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜資料を配布。			
参考書又は参考資料等			
・講義の進度に合わせて、適宜紹介します。			
そ の 他（受講生への要望等）			
・担当教員へ質問等がある場合、オフィスアワーの時間もしくは、メール等で事前に連絡して下さい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
hynobius@knwu.ac.jp	(大澤)		
yasushi@knwu.ac.jp	(杉元)		

授 業 科 目 名	健康科学研究法特論演習（小倉南区キャンパス）		
担 当 者 名	大丸 幸 ・ 大峯 三郎		
科 目 コ ー ド	1900023	授 業 形 態	演習
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	1	履 修 方 法	必修
授業の概要と方法	大丸（7回）：自らの修士論文研究を遂行するにあたり、健康科学研究法の視点から意見交流・吟味ができるように、事例や関連論文を媒介にしてグループ学習を行う。 大峯（8回）：リハビリテーションにおける臨床医学領域での特に高齢者への健康増進としての運動負荷量と栄養状態や疲労に関連する論文を中心にリハと栄養との現状について学修する。		
授業の到達目標	1. 健康科学研究法の視点から、自らの修士論文についてグループ学習を通してお互いの研究論文を吟味できる力量を養う。 2. 健康と栄養に関連するリハビリテーションのあり方について現状の認識と栄養が果たす役割を理解することができる。		
授 業 計 画			
1.	健康科学研究法とは：建学の精神と教育理念、健康の概念・環境・指標		（大丸）
2.	研究は何のためにするのか：ICIDHとICF、事例演習：障害受容とうつのあらわれ		（大丸）
3.	研究を進める上でリハビリテーション中に起きたアクシデントと法的責任の事例演習から学ぶこと		（大丸）
4.	自らの修士論文研究についての意見交流ができるグループ演習①		（大丸）
5.	自らの修士論文研究についての意見交流ができるグループ演習②		（大丸）
6.	自らの修士論文研究についての吟味ができるグループ演習①		（大丸）
7.	自らの修士論文研究についての吟味ができるグループ演習②		（大丸）
8.	リハビリテーション医療と健康に関する定義と概念		（大峯）
9.	リハビリテーション医療における高齢障害者の現状		（大峯）
10.	栄養状態が障害者に及ぼす影響（運動強度と疲労）①		（大峯）
11.	栄養状態が障害者に及ぼす影響（運動強度と疲労）②		（大峯）
12.	栄養とサルコペニア		（大峯）
13.	リハビリテーションとアンチエイジング		（大峯）
14.	修士論文研究内容に関する意見交換①		（大峯）
15.	修士論文研究内容に関する意見交換②		（大峯）
成 績 評 価 の 方 法 【評価項目と割合】			
演習討議（大丸）	演習ワークシート（大丸）	演習討議（大峯）	
50%	50%	100%	
授 業 外 で 行 っ て 欲 し い 学 習 （ 準 備 学 習 ・ 事 後 学 習 等 ）			
大丸：各自が自らの修士論文についてのグループ演習を行いますので、話題提供とする資料提出の準備をしてください。			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜、関連資料を配布する。			
参 考 書 又 は 参 考 資 料 等			
○「わかりやすい公衆衛生学 第4版」 清水忠彦・佐藤拓代 編集（ヌーベルヒロカワ,2015） ○「医療心理学」 乾吉祐（金剛出版,2007）			
そ の 他 （ 受 講 生 へ の 要 望 等 ）			
大丸：自らの修士論文についてのグループ演習は、お互いの意見交流ができるように臨んでください。 大峯：修士論文研究に関する研究計画等の提出と内容の検討も含めて実践します。			
担 当 教 員 の 連 絡 先 等			
担当教員 E-mail		その他	
ohmaru@knwu.ac.jp（大丸） ohmine@knwu.ac.jp（大峯）			

授 業 科 目 名	臨床栄養学特論 I		
担 当 者 名	池本 美智子		
科 目 コ ー ド	1900001	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	高齢化社会を迎え、各種の栄養障害を抱えた患者が増加してきています。人体には「生きる力」があります。この力を発揮するためには体外から取り入れる栄養素が不可欠です。ここでは、色々な疾患について栄養状態の評価、栄養補給法の選定などの栄養管理について理解してもらいます。		
授業の到達目標	生体内での代謝を理解し、その異常である疾病を理解する。その上で栄養評価・栄養管理法解説する。消化器系の手術手技とその特徴、経口、経腸および経静脈を用いた栄養管理法の実際を論理的に理解させる。		
授 業 計 画			
1.	栄養状態の評価		
2.	栄養補給とその特徴		
3.	栄養ケアの基礎		
4.	栄養投与方法の選択		
5.	栄養ケアプラン		
6.	消化器疾患の栄養ケア I		
7.	消化器疾患の栄養ケア II		
8.	代謝疾患の栄養ケア I		
9.	代謝疾患の栄養ケア II		
10.	呼吸器疾患の栄養ケア		
11.	循環器疾患の栄養ケア		
12.	腎疾患の栄養ケア I		
13.	腎疾患の栄養ケア II		
14.	血液疾患の栄養ケア		
15.	まとめ		
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
レポート	授業への取り組み姿勢		
80%	20%		
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
・生化学における、人体内での代謝、および疾病での代謝の変化について理解しておいてほしい。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜プリント等教材を配布する。			
参考書又は参考資料等			
○「栄養食事療法の実習(栄養ケアマネジメント)」 本田佳子 (医歯薬出版株式会社)			
○「ビジュアル栄養療法 (メカニズムからわかる治療戦略)」 丸山千寿子、中屋豊 (南江堂)			
そ の 他 (受講生への要望等)			
・分子生物学の分野が脚光をあびているのでサイトカインとその働きについても理解しておいてほしい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
ikemoto@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	臨床栄養学特論 II		
担 当 者 名	池本 美智子		
科 目 コ ー ド	1900002	授 業 形 態	講義
学 年	2	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	近年、アレルギー疾患が急増している。その理由として ①住環境の変化、②食環境の変化、③精神環境の変化、④体質の変化などが挙げられている。 なかでも最も有力な仮説として、衛生仮説がある。住環境・食環境が以前と比較して極めて衛生的となり、感染症が少なくなり、アレルギーを起こしやすい Th2 リンパ球が相対的に増えてきている。食環境を中心にこの問題について考え、検討してみたい。		
授業の到達目標	1. 免疫にかかわる細胞の種類と役割について理解し、各種のサイトカインについて、理解を深める。 2. リガンドとレセプターについて英文を読みこなせるようになる。		
授 業 計 画			
1.	免疫学Ⅰ：免疫の担い手		
2.	免疫学Ⅱ：抗体各論		
3.	免疫学Ⅲ：MHC（主要組織適合抗原複合体）とHLA（ヒト白血球抗原）		
4.	免疫不全Ⅰ：先天性免疫不全症		
5.	免疫不全Ⅱ：後天性免疫不全症		
6.	アレルギーⅠ：アレルギーの病態生理		
7.	アレルギーⅡ：アレルギー各論		
8.	自己免疫疾患Ⅰ：膠原病総論		
9.	自己免疫疾患Ⅱ：膠原病各論		
10.	自己免疫疾患Ⅲ：検査所見		
11.	自己免疫疾患Ⅳ：関節炎の病態生理		
12.	自己免疫疾患Ⅴ：全身性エリテマトーデス（SLE）		
13.	自己免疫疾患Ⅵ：多発性筋炎・皮膚筋炎		
14.	自己免疫疾患Ⅶ：血管炎		
15.	まとめ		
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
レポート	授業への取組み姿勢		
80%	20%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・近年、免疫異常に関する疾患が増加しているので、免疫学についても学んでおいてほしい。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜プリント等教材を配布する。			
参考書又は参考資料等			
○「新・病態生理でできた内科学6免疫・アレルギー・抗原病」 総監修 村川裕二(医学教育出版社)			
そ の 他 (受講生への要望等)			
・新聞等でアレルギーについて良く報道されているので注意して、理解するように。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail		その他	
ikemoto@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	食品学特論 I		
担 当 者 名	杉元 康志		
科 目 コ ー ド	1900003	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	食品について多面的な観点から学ぶ。栄養的意義、二次機能および三次機能について詳しく解説し、ヒトの健康と食品の持つ潜在的機能について学修する。「食品学特論 I」では食品成分の化学的なアプローチを中心に、食品の機能について最新の情報を提供する。		
授業の到達目標	① 食品成分の構造と機能を理解する。 ② 食品の潜在的機能を理解する。 ③ 食品機能性成分のヒトの健康との関連性について理解する。		
授 業 計 画			
1.	人間と食品（歴史、食物連鎖、栄養健康、食嗜好、環境）		
2.	食品成分①（タンパク質の構造と機能）		
3.	食品成分②（タンパク質の機能）		
4.	食品成分③（糖質の構造と機能）		
5.	食品成分④（脂質の構造と機能）		
6.	食品成分⑤（ビタミンの構造と機能）		
7.	食品成分⑥（ミネラルの機能）		
8.	食と健康①（食品成分の三次機能－概論）		
9.	食と健康②（食品成分の三次機能－抗酸化作用）		
10.	食と健康③（食品成分の三次機能－代謝調節作用）		
11.	食と健康④（食品成分の三次機能－脂質代謝機能）		
12.	食と健康⑤（食品成分の三次機能－免疫調節作用）		
13.	食と健康⑥（食品成分の三次機能－老化防止作用）		
14.	機能性食品（保健機能食品、特別用途食品、特定保健用食品）		
15.	まとめ		
成 績 評 価 の 方 法 【評価項目と割合】			
口頭試問	課題レポート・小テスト		
50%	50%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・食品について深い知識を身につけるため、適宜課題を提供する。参考書や資料を活用し、図書館やインターネットで調査研究し、レポートを作成を提出させることがある。講義に関連した内容についての予習・復習を十分に行うこと。			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
食品機能学	青柳康夫	建帛社	
参考書又は参考資料等			
○「食べ物と健康」 田島眞（同文書院） ・関係資料を配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）			
※成績評価については、各講義内容について口頭試問を行うとともに、課題レポート、小テストの結果及び授業に取り組む姿勢などを加味して、総合的に評価する。 ・受講に際しては、主として、テキスト及び資料をもとに、学習を行うとともに、適宜質疑応答を行う。 課題を与えるので、図書館、インターネット等で調べ、レポートを作成するとともにそのレポート内容について質疑応答を行う。 また、定期的に小テストを実施する。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
yasushi@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	食品学特論 II		
担 当 者 名	杉元 康志		
科 目 コ ー ド	1900004	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	食品について応用面の観点から学ぶ。貯蔵中や加工中の食品成分の変化について詳しく解説し、食品の持つ潜在的機能とヒトへの応用について学修する。「食品学特論II」では最新の発酵の開発、食品バイオテクノロジーの基礎と技術、食品に関する英文科学雑誌を紹介し、最新の情報を提供する。		
授業の到達目標	① 食品成分の変化を理解する。 ② 最新の発酵食品について知る。 ③ バイオテクノロジーについて基礎と技術を理解する。 ④ 欧文学術雑誌を読めるように努める。		
授 業 計 画			
1.	食品加工における諸問題		
2.	食品成分の変化① 水分、糖質		
3.	食品成分の変化② タンパク質 1		
4.	食品成分の変化③ タンパク質 2		
5.	食品成分の変化④ 脂質		
6.	食品成分間反応（酸化、酵素による変化、非酵素的褐変、成分間反応）		
7.	食品における最新のトピックス①		
8.	食品における最新のトピックス②		
9.	食品とバイオテクノロジー①		
10.	食品とバイオテクノロジー②		
11.	食品とバイオテクノロジー③		
12.	英文科学論文購読①		
13.	英文科学論文購読②		
14.	英文科学論文購読③		
15.	まとめ		
成 績 評 価 の 方 法 [評価項目と割合]			
口頭試問	課題レポート・小テスト	その他	
50%	40%	10%	
授 業 外 で 行 う べ き 学 習 (準備学習・事後学習等)			
・食品について深い知識を身につけるため、適宜課題を提供する。参考書や資料を活用し、図書館やインターネットで調査研究し、レポートを作成を提出させることがある。講義に関連した内容についての予習、復習を十分に行うこと。			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参 考 書 又 は 参 考 資 料 等			
○「食べ物と健康」 田島真 (同文書院) ○「ベーシックマスター分子生物学」東中川徹 他 (オーム社) ・関係資料を配布する。			
そ の 他 (受講生への要望等)			
※成績評価については、各講義内容について口頭試問を行うとともに、課題レポート、小テストの結果及び授業に取り組む姿勢などを加味して、総合的に評価する。 ・受講に際しては、主として、テキスト及び資料をもとに、学習を行うとともに、適宜質疑応答を行う。課題を与えるので、図書館、インターネット等で調べ、レポートを作成するとともにそのレポート内容について質疑応答を行う。また、定期的に小テストを実施する。			
担 当 教 員 の 連 絡 先 等			
担当教員 E-mail	その他		
yasushi@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	生化学特論 I		
担 当 者 名	原 研 治		
科 目 コ ー ド	1900007	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	「生化学特論 I」では、生体高分子の中で最も多種多様の役割を持っているタンパク質の構造と機能を理解する。(特に酵素及び免疫や血液凝固などの生体防御に係わるタンパク質)。また、細胞中で生体の持つタンパク質の遺伝情報が細胞中でどのようにして発現されるかを理解し、さらに遺伝子クローニングの基礎を理解する。また、これらの内容の研究論文を講読し理解する。		
授業の到達目標	セントラルドグマを理解し、細胞質で発現されたタンパク質が目的の小器官に運ばれるしくみを理解する。タンパク質の構造と機能が理解でき、さらに遺伝子クローニング時術の基礎が理解できるようになる。		
授 業 計 画			
1.	生体高分子の概要説明 (成分・役割・構造・特徴)		
2.	セントラルドグマ、タンパク質の一次構造		
3.	タンパク質の高次構造と機能		
4.	蛋白質合成の基礎 (転写・翻訳), 蛋白質の選別輸送, シヤペロンの役割		
5.	蛋白質合成とプロセッシング		
6.	酸素傷害の防御 (スーパーオキシドの生成と消去)・ストレス適応、熱ショック適応		
7.	酵素の構造と機能 1) 酵素の分類と作用		
8.	酵素の構造と機能 2) 酵素と補酵素 (ビタミン)		
9.	プロテアーゼの分類, プロテアーゼの役割, 活性制御機構		
10.	血液凝固反応 (血液凝固のカスケード)		
11.	免疫 1) 免疫反応の基礎・抗体の構造・抗体生産細胞・抗体の利用)		
12.	免疫 2) 抗原提示とそれに関わるプロテアーゼ		
13.	核酸の構造・PCR RFLP 法による生物種の分類		
14.	遺伝子組み替え・遺伝子工学の基礎と倫理		
15.	遺伝子組み替え・遺伝子工学の基礎と倫理		
成 績 評 価 の 方 法 [評価項目と割合]			
レポート	授業への取組み姿勢		
80%	20%		
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
・輪講形式で行うので、予習・復習 (特に予習は時間をかけて) しっかりすること。			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参 考 書 又 は 参 考 資 料 等			
○「細胞の分子生物学 (THE CELL) [第3版]」(KYOIKUSHA)			
○「ヴォート生化学」 (東京化学同人) など コピーを配布する。			
そ の 他 (受 講 生 へ の 要 望 等)			
・配布したプリントに予め目を通しておく。			
担 当 教 員 の 連 絡 先 等			
担当教員 E-mail	その他		
hara-k@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名		生化学特論 II	
担 当 者 名		原 研 治	
科 目 コ ー ド	1900008	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	<p>「生化学特論II」では、生理活性物質の特性・機能などに関する最近の情報を学習する。具体的には食品や体成分中の特異的な生理活性を示すペプチドを取り上げる。最近、酵素阻害、酸化抑制、抗菌作用などを有するペプチドが相次いで見出され、さらに機能性食品あるいは医薬品として実用化に向けての展開も試みられている。これらについて英文雑誌を通して先端的な知識を修得すると共に、読解力も養成する。</p>		
授業の到達目標	<p>1) ペプチド・たんぱく質の単離・同定の原理と方法の基礎を理解する。 2) ペプチドの特異的機能・構造 - 機能相関研究及び利用の最近の状況を理解する。 3) 上記②に関する英語論文を輪読し、理解する。 4) 論文検索、輪読の資料作り及び発表を通して、修士として十分な実力を培う。</p>		
授 業 計 画			
1.	たんぱく質の精製		
2.	たんぱく質の構造決定・同定		
3.	タンパク質の構造 - 機能相関の研究例 (1)		
4.	タンパク質の構造 - 機能相関の研究例 (2)		
5.	科学論文の抄読について：科学論文の構成、表現などの説明		
6.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説 (1)		
7.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説 (2)		
8.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説 (3)		
9.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説 (4)		
10.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説 (5)		
11.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説 (6)		
12.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説 (7)		
13.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説 (8)		
14.	レポートの内容発表・質疑応答・講評		
15.	まとめ		
成績評価の方法 【評価項目と割合】			
レポート	授業への取組み姿勢		
80%	20%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・資料を用いての講義及び輪講なので英語論の予習をしっかりと行うこと。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・参考資料（コピー）を必要に応じて配布する。			
参考書又は参考資料等			
特になし			
そ の 他（受講生への要望等）			
・期末に各自のレポート発表と質疑応答を行います。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
hara-k@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	栄養教育特論 I		
担 当 者 名	池本 美智子		
科 目 コ ー ド	1900009	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	<p>生活習慣病及び低栄養状態の予防と重症化予防のために必要な栄養教育の知識を蓄積し、スキルを修得することを目的とする。 栄養教育の対象となる人々の健康状態や栄養状態を把握し、栄養マネジメント(PDCA)をするための方法を習得する。また生活習慣、主として食行動変容のための技法を理解し、食生活改善の支援ができる資質と能力を習得する。 講義内容をスライド及び配付資料により説明、解説を行い、討議形式を取り入れながら授業展開をする。</p> <p>※本講義は、大学院生臨床栄養師認定研修履修細則に規定する臨床栄養師認定講座の栄養教育（生活習慣病：4時間、低栄養状態：6時間、栄養教育の基本：2時間）及び地域栄養活動:2時間の計14時間として申請できる。</p>		
授業の到達目標	<p>1)栄養教育を展開するうえで必要となる理論的基礎、関連スキル、資質を習得する。 2)栄養教育と食育の関連を理解し、説明できる。 3)一次予防、二次予防、三次予防における栄養教育の特徴とその関連を説明できる。 4)食行動変容の段階と各ステージにおける心理的特徴と援助法を習得し、活用できる。 5)主に、生活習慣病及び低栄養状態の予防の栄養教育マネジメントの方法を習得し、活用できる。</p>		
授 業 計 画			
1.	栄養教育と健康教育・ヘルスプロモーション(1) 予防医学及び介護予防における一次予防、二次予防、三次予防、食事摂取基準 2016年版		
2.	栄養教育と健康教育・ヘルスプロモーション(2) 健康日本 21 (第2次)、健康づくりのための身体活動基準・指針 2013 国民健康・栄養調査結果の概要(2014)		
3.	栄養教育と食育 食育基本法、食育白書、第三次食育推進基本計画、高齢社会白書		
4.	栄養教育の国際的動向 食事バランスガイド、My Plate、諸外国の栄養教育と食生活指針		
5.	栄養教育と関わる理論・モデルとその活用(1) 行動科学理論と栄養教育、各種モデルと行動修正技法の適応、個別栄養教育、グループ、集団栄養教育のあり方		
6.	栄養教育と関わる理論・モデルとその活用(2) TTMと意思決定バランス、社会的認知理論（自己効力感）、プリシード・プロシードモデル、ソーシャルキャピタル、コミュニティ・オーガニゼーション		
7.	栄養教育マネジメント(1) 生活習慣病予防、重症化予防のための保健指導・栄養教育 (1) 特定健康診査の階層化と特定保健指導の実際		
8.	栄養教育マネジメント(2) 生活習慣病予防、重症化予防のための保健指導・栄養教育 (2) 糖尿病、脂質異常症、高血圧症患者の栄養教育のための評価と栄養計画作成		
9.	栄養教育マネジメント(3) 低栄養の対策と栄養教育 (1) 総合的栄養評価法、必要栄養量の設定と栄養療法のあり方、地域包括ケアシステム		
10.	栄養教育マネジメント(4) 低栄養の対策と栄養教育 (2) 健康寿命の延伸と虚弱、サルコペニア予防のための評価と栄養計画作成		
11.	栄養教育マネジメント(5) 低栄養の対策と栄養教育 (3) リハビリテーション栄養管理、急性期病院におけるリハビリテーション栄養管理		
12.	栄養教育マネジメント(5) 低栄養の対策と栄養教育 (4) 回復期リハ病棟・介護老人保健施設のリハビリテーション栄養管理、在宅訪問栄養管理、管理栄養士が行う訪問栄養食事指導の有効性（平成28年度診療報酬改定の根拠）		
13.	栄養教育マネジメント(6) 地域連携と保健指導・栄養教育 (1) 地域住民の栄養教育のための栄養評価と食事・栄養計画作成		
14.	栄養教育マネジメント(7) 地域連携と保健指導・栄養教育 (2) 地域連携(自治体、社会福祉協議会及び栄養士会ボランティア活動)の実際		
15.	総括 討議・まとめ 臨床栄養師認定領域内容について受講生によるプレゼンテーション		

成績評価の方法 [評価項目と割合]		
レポート	プレゼンテーション	積極的な授業への取組み姿勢 (ディスカッションへの参加状況)
60%	25%	15%
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)		
事前学習：健康行動及び食行動についての情報収集を心がける。 事後学習：学習内容を整理して復習を行ない、次週の授業に備えるよう心がける。		
使用テキスト		
書籍名	著者	出版社
使用しない		
参考書又は参考資料等		
・講義で随時提示する。		
その他の (受講生への要望等)		
・講義は配付資料 (研究報告書, 文献, 資料など) を適宜用いて進行する。ノートパソコンを持参すること。 ・毎時間、必要な教材・資料として、プリント、冊子などを適宜配付するので、各自ファイリングして活用する。課題のプレゼンテーション時は、発表担当者は事前に資料などの準備を協力して行う。		
担当教員の連絡先等		
担当教員 E-mail	その他	
ikemoto@knwu.ac.jp		

授 業 科 目 名	栄養教育特論 II		
担 当 者 名	池本 美智子		
科 目 コ ー ド	1900010	授 業 形 態	講義
学 年	2	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	<p>生活習慣病の予防には、遺伝、環境要因及び食生活を主とするライフスタイルなど、さまざまな要因が関連している。ここでは栄養疫学の手法についての理解を深めることを目的に、栄養疫学、食環境、疾病予防に関する論文をとりあげ、科学的根拠のある情報を得る能力を習得する。また栄養教育の行動科学理論や方法論、国内外の実践的な栄養教育プログラムに関する研究論文・報告書を調べて、そのプログラムの特徴と栄養教育効果についての発表を行い、栄養・福祉の領域で新しい健康教育・栄養教育プログラムの開発を試みる。</p> <p>講義内容をスライド及び配付資料により説明、解説を行い、討議形式を取り入れながら授業展開をする。</p>		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. エビデンスとは何か? について栄養教育に関する症例対照研究、症例検討を読み、理解する。 2. 健康・栄養情報の種類と価値を理解し、科学的根拠のある情報を得る能力を習得し、健康・栄養情報の教材作成と情報発信を試みる。 3. 履修者の専門領域において、食環境づくりの対策として、新しい栄養教育プログラムの開発を試案する。 4. 栄養疫学の手法を理解し、フレイル及びサルコペニアの予防を目的とした食事指導及び栄養教育の効果について科学的根拠のある情報を得る能力を習得する。 		
授 業 計 画			
1.	エビデンスとは何か?		
2.	栄養・健康情報と EBN(1)	栄養・健康情報の種類と価値	
3.	栄養・健康情報と EBN(2)	健康・栄養情報の収集の実践	
4.	栄養・健康情報と EBN(3)	健康・栄養情報の教材作成と情報発信・評価	
5.	栄養疫学と疫学研究の方法(1)	栄養疫学とは、食事調査の種類と方法	
6.	栄養疫学と疫学研究の方法(2)	食事調査の実際	
7.	栄養疫学と疫学研究の方法(3)	食行動・食知識・食の考え方と質問票	
8.	栄養教育プログラムの検索と開発の試み(1) 栄養教育プログラムの実践と効果		
9.	栄養教育プログラムの検索と開発の試み(2) 食育の評価方法と食育の効果		
10.	栄養教育プログラムの検索と開発の試み(3) 食環境づくりとソーシャル・マーケティング		
11.	栄養教育プログラムの検索と開発の試み(4) 栄養教育プログラムの開発		
12.	「地域包括ケアシステム」、「地域支援事業」(介護保険法)と栄養教育 自立支援の実際(1) 在宅医療、訪問栄養食事指導医療・介護サービスの提供体制の見直し、地域包括ケアシステム構築へ向けた視点・支援について		
13.	「地域包括ケアシステム」、「地域支援事業」(介護保険法)と栄養教育 自立支援の実際(2) 地域包括ケアシステムの基本理念、多職種協働によるケアマネジメント支援、機能分化について		
14.	「地域包括ケアシステム」、「地域支援事業」(介護保険法)と栄養教育 自立支援の実際(3) 介護保険法、介護予防・日常生活支援総合事業、地域支援事業の事業構成、在宅での多職種連携、居宅療養管理指導について		
15.	総括 栄養教育プログラムの検索と開発の試案についてプレゼンテーション 討議・まとめ		
成 績 評 価 の 方 法 【評価項目と割合】			
レポート	プレゼンテーション	積極的な授業への取り組み姿勢 (ディスカッションへの参加状況)	
50%	35%	15%	
授 業 外 で 行 う べ き 学 習 (準備学習・事後学習等)			
<p>事前学習：健康行動及び食行動についての情報収集を心がける。</p> <p>事後学習：学習内容を整理して、復習を行い、次週の授業に備えるよう心がける。</p>			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			

参考書又は参考資料等	
・講義で随時提示する。	
そ の 他 (受講生への要望等)	
・講義は配付資料(研究報告書,文献,資料など)を適宜用いて進行する。ノートパソコンを持参。 ・毎時間、必要な教材・資料として、プリント、冊子などを適宜配付するので、各自ファイリングして活用する。課題のプレゼンテーション時は、発表担当者は事前に資料などの準備を協力して行う。	
担当教員の連絡先等	
担当教員 E-mail	その他
ikemoto@knwu.ac.jp	

授 業 科 目 名	薬理学特論 I		
担 当 者 名	喜多 大三		
科 目 コ ー ド	1900011	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	<p>医療現場における栄養管理・指導、リハビリテーションでのチームアプローチを進める上で、基本的な薬物療法および静脈経腸栄養法による栄養管理の理解やそれらに使用されている薬剤、栄養剤の薬理学および栄養学的知識は必要不可欠である。本講義では、主に自律神経系および糖尿病の関連薬剤、基本的な経腸・静脈栄養剤の体内動態および薬理作用を解説し、それらの薬物療法および静脈経腸法について概説する。また、薬理学分野の英文論文を抄読し、論文内容の把握と理解力を身に付ける。</p> <p>※本講義は、臨床栄養師認定講座の履修相当科目である経腸・静脈栄養法を含む。</p>		
授業の到達目標	<p>1) 医療従事者として必要な薬剤や経腸及び経静脈栄養剤の知識を習得する。</p> <p>2) 医療従事者として必要な薬物療法および経腸栄養法を習得する。</p>		
授 業 計 画			
1.	自律神経系作用薬①交感神経作用薬・遮断薬		
2.	自律神経系作用薬②副交感神経作用薬・遮断薬		
3.	自律神経系作用薬③筋弛緩薬・節遮断薬		
4.	文献抄読		
5.	薬の体内動態に及ぼす食品の影響①代謝過程など		
6.	薬の体内動態に及ぼす食品の影響②味覚・食欲など		
7.	生活習慣病と薬物治療① 1型糖尿病と薬物療法について		
8.	生活習慣病と薬物治療② 2型糖尿病と薬物療法について		
9.	栄養管理の重要性・栄養アセスメントおよび栄養療法の種類と選択		
10.	経腸・静脈栄養剤の種類と選択		
11.	経腸栄養アクセスの管理・静脈栄養アクセスの管理/カテーテル関連血流感染症の診断と治療		
12.	栄養療法の進め方と評価		
13.	小児の栄養管理		
14.	成人の病態別栄養管理		
15.	まとめ		
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
課題レポート	抄読会英語論文レポート		
80%	20%		
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
<p>1) 6月末までに、循環器系及炎症に関する薬物のレポートを提出してもらいます。</p> <p>2) 次の授業までに行うべき予習・復習について指示します。</p>			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
栄養薬理学	田中芳明、中村強 編 森信博、久山哲廣、柴田哲雄、喜多大三、柏原典雄、上坂英二 共著	建帛社	
参考書又は参考資料等			
<p>○「第10版 Goodman&Gilman 薬理書(上下)」 Laurence Brunton 編、高折修二 訳 (廣川書店)</p> <p>○「分子神経薬理」(西村書店) ○「New 薬理学」田中千賀子、加藤隆一 (南山堂)</p> <p>○「NST ガイドブック」日本病態栄養学会編集 (メディカルレビュー社)・講義毎に資料を配布する。</p>			
そ の 他 (受講生への要望等)			
<p>※成績評価については、自律神経系薬物と食品と薬物との相互作用に関するレポートおよび糖尿病・薬物療法および静脈経腸栄養に関するレポート (90%)、文献抄読レポート (10%) 各レポートの合計で評価する。</p> <p>・質問等のある場合は、2号館 708 研究室にて対応。火曜日と木曜日 16時30分～17時30分の時間帯でオフィスアワーの時間になっていますので、講義の前後かメール等で事前連絡下さい。</p>			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
kita@knwu.ac.jp	質問等は、水・木曜日 16時20～17時00分の時間帯のオフィスアワーで小倉北区キャンパス 2号館 708室で対応します。(喜多担当分)。		

授 業 科 目 名		薬理学特論 II	
担 当 者 名		喜多 大三	
科 目 コ ー ド	1900012	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	健康日本 21(第二次)の推進において、従来からの食生活の改善や運動習慣の定着等による一次予防に重点を置いた対策を推進するとともに、生活習慣病の発症予防とがん、循環器疾患、糖尿病及び COPD（慢性閉塞性肺疾患）などの NCDs（非感染性疾患）の合併症の発症や症状の進展などの重症化の予防に重点を置いた対策を推進すべきであると提言している。「薬理学特論 II」では、生活習慣病や NCD 疾患における薬物治療の概略とそれに必要な医薬品の作用機序および薬理作用、副作用について概説する。また、薬理学分野の英文論文を抄読し、論文内容の把握と理解力を身に付ける。		
授業の到達目標	1) 生活習慣病や NCDs 疾患における薬物治療の理解とそれに必要な医薬品の薬理作用および副作用に関する知識を習得する。 2) 薬理学分野の英語論文を把握および理解し、まとめる能力を身につける。		
授 業 計 画			
1.	生活習慣病と NCDs について		
2.	循環器系に作用する薬 I：高血圧症と生活習慣の修正、高血圧と合併症など		
3.	循環器系に作用する薬 II：虚血性心疾患に対する治療薬など		
4.	循環器系に作用する薬 III：高脂血症と生活習慣の修正など		
5.	文献抄読 I		
6.	炎症に関する薬 I：痛風および高尿酸血症など		
7.	代謝・内分泌に作用する薬 II：骨粗鬆症とその治療薬など		
8.	代謝・内分泌に作用する薬 II：骨粗鬆症とその治療薬など		
9.	呼吸器・消化器系に作用する薬: COPD、気管支喘息および胃潰瘍治療薬など		
10.	文献抄読 II		
11.	中枢神経作用薬 I：パーキンソン病治療薬、アルツハイマー病など		
12.	中枢神経作用薬 II：抗精神病薬、抗不安薬、抗うつ・抗躁病薬など		
13.	腫瘍の化学療法薬について		
14.	文献抄読 III		
15.	まとめ		
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
課題レポート	抄読会英語論文レポート①	抄読会英語論文レポート②	抄読会英語論文レポート③
70%	10%	10%	10%
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
1) 循環器系及炎症に関する薬物のレポートを提出してもらいます。 2) 次の授業までに行うべき予習・復習について指示します。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・講義毎に資料を配布する。			
参考書又は参考資料等			
○「第 10 版 Goodman&Gilman 薬理書（上下）」Laurence Brunton 編、高折修二 訳（廣川書店） ○「分子神経薬理」（西村書店）○「New 薬理学」田中千賀子、加藤隆一（南山堂）・講義毎に資料を配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）			
※成績評価については、循環器系薬物と炎症に関する薬物のレポートおよび骨粗鬆症、COPD、中枢神経系および腫瘍の各治療薬に関するレポート（70%）、文献抄読レポート（30%）各レポートの合計で評価する。 ・質問等のある場合は、2号館 708 研究室にて対応。火曜日と木曜日 16 時 30 分～17 時 30 分の時間帯でオフィスアワーの時間になっていますので、講義の前後かメール等で事前に連絡下さい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
kita@knwu.ac.jp	質問等は、水・木曜日 16 時 20～17 時 00 分の時間帯のオフィスアワーで小倉北区キャンパス 2 号館 708 室で対応します。（喜多担当分）。		

授 業 科 目 名		食品加工学特論 I	
担 当 者 名		杉元 康志	
科 目 コ ー ド	1900013	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	動物性食品の特徴とその加工食品について解説する。「食品加工学特論 I」では、動物性食品、特に牛乳・乳製品及び食肉製品を中心にそれらの原料の理化学的特性や嗜好的特性およびそれらの加工プロセスによる品質変化について深く探求する。具体的には乳及び肉製品に関して、機能性成分、近年の科学的、技術的動向や課題などについて深く理解させる。		
授業の到達目標	牛、乳製品及び各種肉製品の原料の理化学的特性や嗜好的特性について理解するとともに、加工プロセスによる品質変化について、近年の科学的、技術的動向や課題などを理解する。乳、肉製品の機能性成分についても理解する。		
授 業 計 画			
1.	動物性食品について		
2.	牛乳の成分①:たんぱく質		
3.	牛乳の成分②:脂質、糖質、ビタミン、ミネラル他		
4.	牛乳・乳製品製造の基礎、市乳処理		
5.	クリーム、バター及びアイスクリームの加工、練乳、粉乳その他		
6.	発酵乳製品①:発酵乳、乳酸菌飲料		
7.	発酵乳製品②:チーズ		
8.	食肉の科学		
9.	筋肉の構造と機能、死後硬直、解硬と熟成		
10.	食肉の成分①:たんぱく質		
11.	食肉の成分②:脂質、糖質、ビタミン、ミネラル他)		
12.	肉製品製造:ハム、ベーコン、ソーセージ		
13.	牛乳の機能性		
14.	食肉の機能性		
15.	まとめ		
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
口頭試問	課題レポート・小テスト	その他	
50%	40%	10%	
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
・牛乳、乳製品及び肉製品について、適宜課題を与えるので、図書館やインターネットで調査研究し、レポートを作成していただく。講義に関連した内容についての予習・復習を十分に行うこと。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参考書又は参考資料等			
○「動物性資源利用学」伊藤敏敏、渡邊乾二、伊藤 良 (文永堂) ・関係資料を配布する。			
そ の 他 (受講生への要望等)			
※成績評価については、各講義内容について口頭試問を行うとともに、課題レポート、小テストの結果及び授業に取り組む姿勢などを加味して、総合的に評価する。 ・受講に際しては主として、資料をもとに、学習を行うとともに、適宜質疑応答を行う。課題を与えるので、図書館、インターネット等で調べ、レポートを作成するとともにそのレポート内容について質疑応答を行う。また、定期的に小テストを実施する。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
yasushi@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名		食品加工学特論 II	
担 当 者 名		杉元 康志	
科 目 コ ー ド	1900014	授 業 形 態	講義
学 年	2	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	我々の食生活は豊かになり、食環境の多様化や複雑化、あるいは国際化によってその中で生産・加工・流通・保存・貯蔵の技術は目覚しく進歩してきた。「食品加工学特論II」では食品の加工及び貯蔵についての専門知識を高め、食品学を究める学生の資質の向上を図る。具体的には、食卵の科学、いくつかの食品の加工・貯蔵の関わる、基礎的な特性を理解し、加工との関連を考察する。最新の研究も紹介する。		
授業の到達目標	1. 食卵についての基礎的・応用的知識を習得する。 2. それぞれの食品の加工・貯蔵の関わる、食品成分の基礎的な特性を理解し、加工との関連を考察する。		
授 業 計 画			
1.	「食品加工学特論II」の目的と概略		
2.	食卵の科学①タンパク質の化学		
3.	食卵の科学②機能性と利用		
4.	水産食品の加工と問題点		
5.	新しい加工食品の紹介		
6.	植物性食品の加工学：穀類の加工（コメ、小麦他）、豆類の加工（大豆他）		
7.	植物性食品の加工学：いも類、でんぷん、野菜、果実の加工、油脂、でんぷんの加工、調味料、香辛料、甘味料の加工		
8.	最新の論文の紹介①		
9.	最新の論文の紹介②		
10.	最新の論文の紹介③		
11.	最新の研究の紹介①		
12.	最新の研究の紹介②		
13.	最新の研究の紹介③		
14.	加工食品のトピックス		
15.	まとめ		
成 績 評 価 の 方 法 【評価項目と割合】			
口頭試問	課題レポート・小テスト	その他	
50%	40%	10%	
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・食品の加工及び貯蔵法について、適宜課題を与えるので、図書館やインターネットで調査研究し、レポートを作成していただく。講義に関連した内容についての予習・復習を十分に行うこと。			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参 考 書 又 は 参 考 資 料 等			
○「食べ物と健康Ⅲ 食品加工と栄養」船津保浩、竹田保之、加藤淳 編著（三共出版） ・関係資料を配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）			
※成績評価については、各講義内容について口頭試問を行うとともに、課題レポート、小テストの結果及び授業に取り組む姿勢などを加味して、総合的に評価する。 ・受講に際しては主として、テキスト及び資料をもとに、学習を行うとともに、適宜質疑応答を行う。課題を与えるので、図書館、インターネット等で調べ、レポートを作成するとともにそのレポート内容について質疑応答を行う。また、定期的に小テストを実施する。			
担 当 教 員 の 連 絡 先 等			
担当教員 E-mail			その他
yasushi@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名		解剖生理学特論 I	
担 当 者 名		大澤 得二	
科 目 コ ー ド	1900015	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	ヒトの体の成り立ちを根本から理解するために、その構造と機能を細胞レベルから組織レベルにいたるまでを学ぶ。英文の成書を直接読み、現在の学問のレベルにふれていく。		
授業の到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒトの体の成り立ちについて、細胞レベルから組織にいたるまでを理解する。 ・英文成書を抄読する力をつける。 		
授 業 計 画			
1.	細胞とは (1)	Introduction to cells	
2.	細胞とは (2)	Chemical components of cells	
3.	細胞とは (3)	Membrane structure	
4.	細胞とは (4)	Cytoskeleton	
5.	細胞とは (5)	Cell division	
6.	細胞が食物からエネルギーを得る仕組み (1)	Introduction	
7.	細胞が食物からエネルギーを得る仕組み (2)	Food molecules	
8.	細胞が食物からエネルギーを得る仕組み (3)	Glycolysis	
9.	細胞が食物からエネルギーを得る仕組み (4)	Electron transport	
10.	細胞が食物からエネルギーを得る仕組み (5)	Store food molecules	
11.	組織の成り立ち (1)	Extracellular matrix	
12.	組織の成り立ち (2)	Collagen	
13.	組織の成り立ち (3)	Cell-cell junctions	
14.	組織の成り立ち (4)	Basal lamina	
15.	組織の成り立ち (5)	Tissue maintenance	
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
レポート			
100%			
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
・受講者の発表を中心に進めるので、当日の担当者は成書の担当部分を精読してくること。			
使用テキスト			
書籍名	著者		出版社
※その他欄参照			
参考書又は参考資料等			
・講義の進度に応じて、適宜紹介していきます。			
そ の 他 (受講生への要望等)			
※テキストについては、Essential Cell Biology (Garland Publishing, Inc. NY)より抜粋した資料を配布する。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
hynobius@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名		解剖生理学特論 II	
担 当 者 名		大澤 得二	
科 目 コ ー ド	1900016	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	ヒトの体の成り立ちを根本から理解するために、個体の発生及び臓器の発生を学ぶ。同時に遺伝的な疾病の原因を考察する。英文成書を読み解く力を養う。		
授業の到達目標	・ヒトの体の成り立ちについて発生学的に学び、固体の発生と遺伝的な疾病の原因を理解する。 英文成書を抄読する力をつける。		
授 業 計 画			
1.	受精、新しい個体のはじまり (1) Egg and sperm		
2.	受精、新しい個体のはじまり (2) Fertilization		
3.	脊椎動物の初期発生 (1) Early development in fish		
4.	脊椎動物の初期発生 (2) Early development in birds		
5.	脊椎動物の初期発生 (3) Early mammalian development		
6.	骨格系 (1) Skull, Limb		
7.	骨格系 (2) Vertebral column		
8.	心臓脈管系 (1) Formation of the heart tube		
9.	心臓脈管系 (2) Arterial system		
10.	消化器系 (1) Esophagus, Stomach, Duodenum		
11.	消化器系 (2) Liver, Pancreas		
12.	泌尿生殖器系 (1) Urinary system		
13.	泌尿生殖器系 (2) Genital system		
14.	頭頸部 (1) Pharyngeal arches		
15.	頭頸部 (2) Facial swelling and upper lip		
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
レポート			
100%			
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
・受講者の発表を中心に進めるので、当日の担当者は成書の担当部分を精読してくること。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
※その他欄参照			
参考書又は参考資料等			
・講義の進度に応じて、適宜紹介していきます。			
そ の 他 (受講生への要望等)			
※テキストについては、Developmental Biology (Gilbert, Sinauer Associates, Inc, U.S.A.)および Medical Embryology (Langman, Williams&Wilkins, U.S.A.)より抜粋した資料を配布する。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail			その他
hynobius@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	リハビリテーション学特論 I		
担 当 者 名	橋元 隆 ・ 大丸 幸		
科 目 コ ー ド	1900025	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	<p>大丸 (7回) : 医療リハビリテーションの基礎に基づいて、地域で暮らす高齢・障害児者の生活支援技術を学修する。</p> <p>橋元 (8回) : リハビリテーションの概念は大きく変化し、現在では単に障害に対する治療・訓練というものではなく、高度に進歩した臓器別専門治療を提供し、住み慣れたところで安心して自分らしく暮らせるように具現化するところにある。心身機能の改善のみではなく最終的には「生活支援」という言葉をキーワードとして、地域で人間らしく生きることについて考える。</p>		
授業の到達目標	<p>大丸 (7回) : 病気や障害があって自分らしく暮らすリハビリテーション支援の実際について、事例演習を討論しながら学修する。</p> <p>橋元 (8回) : 健康づくりから疾病予防、さらには高度急性期から地域生活に至るまでの過程において、多職種との質の高い連携を構築し、最終的には地域づくりに貢献できる。</p>		
授 業 計 画			
1.	「障害診断」と「リハビリテーション評価」の視点	(大丸)	
2.	「問題患者とは何か」の事例演習	(大丸)	
3.	「医療から地域移行」を支援するリハビリテーション	(大丸)	
4.	「地域包括支援センター」での対応事例演習	(大丸)	
5.	「難病家族の心理的な問題」の事例演習	(大丸)	
6.	「リハビリテーションプロセスにおける家族心理教育」の事例演習	(大丸)	
7.	「精神障害者の危機介入」に必要な医療福祉連携の事例演習	(大丸)	
8.	医学的リハビリテーションの流れ	(橋元)	
9.	高度急性期・急性期リハビリテーション	(橋元)	
10.	回復期リハビリテーション	(橋元)	
11.	維持期・生活期リハビリテーション	(橋元)	
12.	ヘルスプロモーション・介護予防	(橋元)	
13.	在宅生活を支えるツール：在宅医療・在宅看護・在宅リハ・在宅介護	(橋元)	
14.	食と運動、健康生活の番人	(橋元)	
15.	地域づくりにおける制度・人・組織の課題について	(橋元)	
成績評価の方法 【評価項目と割合】			
※その他欄参照			
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
大丸：準備学修：事前配布資料を読む。事後学修：事例検討結果のワークシートの提出。			
橋元：日々の出来事について様々なメディアを通じて情報の収集を図って欲しい。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・随時資料を配布する。			
参考書又は参考資料等			
○蜂須賀研二編集：「服部リハビリテーション技術全書 第3版」（医学書院 2014）			
○乾吉祐：「医療心理学実践の手引き」（金剛出版 2007）			
そ の 他（受講生への要望等）			
※成績評価については、			
大丸：事例演習と発表（50%）、事例検討結果のワークシート（50%）			
橋元：授業での質疑（50%）、課題（レポートなど）への取り組み（50%）として評価する。			
大丸：事例演習が中心となりますので、事前事後の学修を主体的に行うこと。			
橋元：各テーマに基づいたディスカッションができることを期待します。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
hashimoto@knwu.ac.jp（橋元）			
ohmaru@knwu.ac.jp（大丸）			

授 業 科 目 名	リハビリテーション学特論 II		
担 当 者 名	大峯 三郎		
科 目 コ ー ド	1900027	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	1	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	リハビリテーションの対象となる障害者の多くは高齢者であり、その多くは何らかの栄養障害を呈している。リハ実施に際してこの点を考慮する必要性が指摘されている。特に高齢者を対象とする場合の運動療法に際しては疾患や障害特性のみではなく、加齢に伴う筋肉量の減少であるサルコペニアの存在、低栄養やホルモン分泌低下等に留意して介入を図る必要がある。この科目では疾患固有の栄養障害を知り、栄養障害が運動に及ぼす影響について学習する。		
授業の到達目標	1) 障害と栄養障害との関連性を理解できる。 2) 高齢者の栄養障害に対する運動負荷の影響を理解できる。 3) 高齢者の体力と栄養状態との関連性について理解できる。		
授 業 計 画			
1.	高齢者・障害者の栄養状態（総論）		
2.	高齢者・障害者の栄養スクリーニングとアセスメント		
3.	高齢者・障害者のサルコペニア（総論）		
4.	高齢者・障害者のサルコペニアと運動療法		
5.	高齢者・障害者の身体特性		
6.	高齢者・障害者の運動特性		
7.	栄養管理（栄養障害と身体運動）		
8.	栄養管理（疾患と栄養障害）		
9.	文献抄読（高齢者・障害者の体力に関連する和文）		
10.	文献抄読（高齢者・障害者の栄養に関連する和文）		
11.	文献抄読（高齢者・障害者の運動特性と身体特性に関連する和文）		
12.	文献抄録（高齢者・障害者の体力に関連する英文）		
13.	文献抄読（高齢者・障害者の栄養に関連する英文）		
14.	文献抄読（高齢者・障害者の運動特性と身体特性に関連する英文）		
15.	まとめ		
成績評価の方法 〔評価項目と割合〕			
授業への取組み姿勢	論文抄読発表内容		
50%	50%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
1) 授業は資料に基づく解説と受講者との討論を中心に実施。 2) 文献については抄読形式で行う。 3) 栄養障害や高齢者・障害者の運動療法に関する参考文献を各自で検索する。			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜資料を配布する。			
参考書又は参考資料等			
特になし			
そ の 他（受講生への要望等）			
・履修者は英語文献の抄読に備えて早めに翻訳を行い準備に専念すること。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
ohmine@knwu.ac.jp	オフィスアワーの利用を進める。火曜日 16:20～17:00、木曜日 12:10～13:10		

授 業 科 目 名	健康運動機能特論 I		
担 当 者 名	大峯 三郎 ・ 高橋 精一郎		
科 目 コ ー ド	1900028	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	リハビリテーション医療において、運動機能の強化とそれに伴う行動体力の向上が不可欠である。運動後、早期の疲労回復を図ることも運動機能の維持・強化には必要であり、栄養摂取による疲労の軽減について検討することが大切である。本科目では栄養摂取物や摂取量の違いによる運動への影響について講義し、ディスカッションを行う。		
授業の到達目標	・運動疲労の回復について、使用摂取物や摂取量、摂取時期等の運動疲労の起こりにくい条件ならびに回復の早い条件を検討し、運動と栄養の関係を考察できる。		
授 業 計 画			
1.	運動と栄養の関係を考える（高橋）		
2.	運動による疲労と神経活動の検討（高橋）		
3.	運動負荷条件 1 での疲労と神経活動の検討（高橋）		
4.	運動負荷条件 2 での疲労と神経活動の検討（高橋）		
5.	運動負荷条件 1 での飲食物 A 摂取による疲労と神経活動の検討（高橋）（以下 12 までは運動実施後摂取）		
6.	運動負荷条件 2 での飲食物 A 摂取による疲労と神経活動の検討（高橋）		
7.	運動負荷条件 1 での飲食物 B 摂取による疲労と神経活動の検討（高橋）		
8.	運動負荷条件 2 での飲食物 B 摂取による疲労と神経活動の検討（高橋）		
9.	動負負荷条件 1 での飲食物 A 摂取量の違いによる疲労と神経活動の検討（大峯）		
10.	運動負荷条件 2 での飲食物 A 摂取量の違いによる疲労と神経活動の検討（大峯）		
11.	運動負荷条件 1 での飲食物 B 摂取量の違いによる疲労と神経活動の検討（大峯）		
12.	運動負荷条件 2 での飲食物 B 摂取量の違いによる疲労と神経活動の検討（大峯）		
13.	運動負荷条件 1 での飲食物 A 摂取による疲労と神経活動の検討（大峯）（13,14 は運動実施前摂取）		
14.	運動負荷条件 1 での飲食物 B 摂取による疲労と神経活動の検討（大峯）		
15.	まとめ（大峯）		
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
※その他欄参照			
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・疲労回復を促すサプリメント及び運動時の疲労を評価する指標について事前に準備し、疲労回復効果についてのまとめを事後学修すること。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・随時資料を配布する。			
参考書又は参考資料等			
特になし			
そ の 他（受講生への要望等）			
※成績評価については、授業及び討論への参加姿勢にて総合的に評価。 ・疲労回復を促進するサプリメントと運動量との関連を検討するので、興味を持って参加してほしい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail		その他	
ohmine@knwu.ac.jp（大峯）			
s-takahashi@knwu.ac.jp（高橋）			

授 業 科 目 名	健康運動機能特論 II		
担 当 者 名	橋元 隆		
科 目 コ ー ド	1900030	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	1	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	健康とは身体的能力だけでなく、社会的な面を含めた資源という点を重視した前向きな考えである。健康づくりとは、健康になることが目的ではなく、豊かな質の高い生活をするための手段である。人々が自らの健康をうまくコントロールし、改善していけるようになるプロセスである。そのための課題、手法について北九州市の取り組みなど紹介し、介護予防事業などにおける効果的で、継続性のある運動等に関するプログラムの検討やその成果の検証をおこなう。		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康とは何かを高齢者等へ説明でき、介護予防事業への参加を推進できる。 2. 各介護予防に関する事業、障害者や高齢者スポーツを経験しながら、そのプログラムの検証ができる 3. 自ら介護予防プログラムを作成できる。 		
授 業 計 画			
1.	介護予防事業の取り組みについて		
2.	ヘルスプロモーション・介護予防について		
3.	メタボ・ロコモティブシンドロームについて		
4.	「きたきゅう体操」・「E・G体操」について		
5.	「介護予防太極拳 ひまわりタイチー」について		
6.	「女性のための尿失禁予防体操」について		
7.	「公園に設置している健康遊具」について		
8.	運動器機能向上プログラムについて		
9.	栄養改善・口腔ケアプログラムについて		
10.	認知症予防プログラムについて		
11.	障害者スポーツについて		
12.	障害者・高齢者レクリエーションについて		
13.	高齢者ケア（入所・訪問・通所ケア）について		
14.	介助ロボット（移乗・歩行支援）について		
15.	運動と栄養，スポーツ栄養について		
成績評価の方法 【評価項目と割合】			
授業への取り組み姿勢	課題（レポート等）		
50%	50%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
<ul style="list-style-type: none"> ・演習が中心となり、現地での見学・参加を心がける。 ・課題に対して、資料収集など主体性を持って授業に臨んでください。 			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参考書又は参考資料等			
<ul style="list-style-type: none"> ・資料を随時配布する。 			
そ の 他（受講生への要望等）			
<ul style="list-style-type: none"> ・健康づくり，各介護予防プログラムを実際に経験していただくので習得，指導できるようになってください。 			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
hashimoto@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	自律神経障害支援特論 I		
担 当 者 名	高橋 精一郎		
科 目 コ ー ド	1900031	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	リハビリテーションの対象には神経・筋疾患や骨・関節疾患、呼吸・循環・代謝障害の内部疾患などがあるが、それらの中には自律神経障害を有しているケースも見られる。自律神経は血圧や呼吸の調節を行うことから、神経活動を解析することで運動負荷量の判断や治療効果の判定指標として利用できる。本授業では自律神経活動の機序を理解するとともに、心電図から自律神経活動を分析し、その意味を解釈する。		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自律神経活動の機序を理解したうえで、心電図の測定から自律神経活動を分析し、その結果の解釈ができる。 2. 臨床研究における測定指標としての意義を理解し、活用できる。 		
授 業 計 画			
1.	自律神経系の構造と機能		
2.	自律神経活動の機序と身体反応		
3.	自律神経障害の症状		
4.	運動と自律神経活動の関連		
5.	自律神経活動の測定方法		
6.	自律神経の測定と分析		
7.	運動時の自律神経活動の変化		
8.	姿勢の違いによる自律神経活動の変化の比較（臥位）		
9.	姿勢の違いによる自律神経活動の変化の比較（坐位）		
10.	姿勢の違いによる自律神経活動の変化の比較（立位）		
11.	運動の種類の違いによる自律神経活動の変化の比較（椅子からの立ち上がり）		
12.	運動の種類の違いによる自律神経活動の変化の比較（スクワット）		
13.	運動の種類の違いによる自律神経活動の変化の比較（重りによる負荷時）		
14.	自律神経活動分析の臨床応用		
15.	まとめ		
成績評価の方法 【評価項目と割合】			
※その他欄参照			
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・自律神経活動について生理学等、学部時代に勉強した内容について事前に学習し、新た知識については事後の学修にて整理し、理解すること。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・資料を随時配布します。			
参考書又は参考資料等			
特になし			
そ の 他（受講生への要望等）			
<p>※成績評価については、授業及び討論への参加姿勢により総合的に評価。</p> <p>・外部刺激に対する身体反応に興味を持って参加してほしい。</p>			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail		その他	
s-takahashi@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	自律神経障害支援特論 II		
担 当 者 名	渕 雅子		
科 目 コ ー ド	1900032	授 業 形 態	講義
学 年	2	開 講 期	前期
単 位 数	1	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	リハビリテーションが対象とする患者は、末梢神経障害、中枢神経障害、代謝性疾患、長期臥床による廃用症候群や呼吸器障害など多岐に渡っている。これらの疾患や障害が、自律神経の反応にどのように影響するか、あるいはどのような自律神経障害に関連しているかを考える。		
授業の到達目標	各種疾患と自律神経障害との関連から、リハビリテーションプログラム立案時および施行時の留意点を理解する。		
授 業 計 画			
1.	全身性自律神経障害と局所性自律神経障害		
2.	自律神経障害を来す主な疾患		
3.	①脳血管障害と自律神経障害		
4.	②リハビリテーション施行時の留意点		
5.	①パーキンソン病と自律神経障害		
6.	②リハビリテーション施行時の留意点		
7.	①ギランバレー症候群と自律神経障害		
8.	②リハビリテーション施行時の留意点		
9.	①多発性硬化症と自律神経障害		
10.	②リハビリテーション施行時の留意点		
11.	①脊髄損傷と自律神経障害		
12.	②リハビリテーション施行時の留意点		
13.	①糖尿病と自律神経障害		
14.	②リハビリテーション施行時の留意点		
15.	まとめ		
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
※その他欄参照			
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
・自律神経活動そのものに対する理解を深めるために、これまでの基礎知識を整理する。学習後は、復習を習慣付けること。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・資料を配布予定。			
参考書又は参考資料等			
特になし			
そ の 他 (受講生への要望等)			
※成績評価については、積極性や探究心、授業中の態度により総合的に評価する。 ・各種疾患と自律神経の関連を深く理解して下さい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
fuchi@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	地域活動支援特論 I		
担 当 者 名	大丸 幸		
科 目 コ ー ド	1900033	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	高齢者や障害児者が地域で自分らしく暮らす支援に関わるために必要な理論と技法をリハビリテーションの視点から探求する。特にリハビリテーション専門家の立場からの「地域を見る視点」「地域に働きかける姿勢」「専門家としての役割」についてのPDCAサイクルを学修する。		
授業の到達目標	1、病気や障害がある人が地域で暮らすうえで必要なことを学修する。 2、生活支援に係る法制度や地域づくりの実際を学修する。 3、地域診断から地域に働きかけるまでのPDCAサイクルに参加できるようになる。		
授 業 計 画			
1.	高齢者を取り巻く現状と今後の課題		
2.	地域包括支援システムにおけるセラピストの役割		
3.	病気や障害がある高齢者の生活支援の事例演習		
4.	病気や障害がある高齢者への相談対応事例演習		
5.	医療と介護の連携事業チームの一員となれるために		
6.	障害者を地域で支えるマネジメントの実践		
7.	障害者総合支援法、発達障害者支援法と障害福祉サービス（社会資源）		
8.	市区町村相談実践事例演習		
9.	高次脳機能障害、発達障害児者の事例演習		
10.	非定形精神病と下半身麻痺の重複障害者のマネジメントの事例演習		
11.	地域精神保健と急性期精神科リハビリテーション		
12.	精神科病院長期入院患者の退院支援における保健所の役割		
13.	リハビリテーションプロセスにおける家族心理教育の事例演習		
14.	働きたいを支えるリハビリテーション		
15.	地域生活の継続援助と危機介入支援に向けて		
成 績 評 価 の 方 法 【評価項目と割合】			
演習課題発表	ゼミ形式で進めますので、テーマへの積極的参加を重視します。		
50%	50%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
準備学習：特に事例演習は事前に読んで出席すること。 事後学習：演習ワークシートを次週に提出すること。			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
・テーマにそった資料を配布します。			
参 考 書 又 は 参 考 資 料 等			
○赤澤宏平他：「公衆衛生がみえる」（メディックメディア 2014） ・毎回、配布資料がありますので、資料整理を行ってください。 ・資料の出典や関連参考書を随時、紹介します。			
そ の 他（受講生への要望等）			
※テキストについては、テーマに沿って随時、資料配布するとともに、参考書を紹介します。 ・高齢者、障害児者が医療から地域移行および地域で暮らす支援のPDCAを事例演習しますので、小グループで討議できるようになることを期待します。			
担 当 教 員 の 連 絡 先 等			
担当教員 E-mail		その他	
ohmaru@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	地域活動支援特論 II		
担 当 者 名	大丸 幸		
科 目 コ ー ド	1900034	授 業 形 態	講義
学 年	2	開 講 期	前期
単 位 数	1	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	「地域活動支援特論 I」で学修した内容を充実するために、関連文献や先行研究レビューを主とした演習を行い、自らの修士論文作成に伴う研究課題の補完演習を行う。また、対象者を高齢者や障害児者に留まらず、地域住民の健康増進のための PDCA サイクルを実務的に学修する。		
授業の到達目標	1. 高齢、障害児者の生活実態の研究レポートと研究手法を学修する。 2. 医療から生活定着までの PDCA サイクルでの研究レビューを学修する。 3. 地域貢献できる研究レビューについて論考できるようになる。		
授 業 計 画			
1.	高齢者のための生活支援学とその実際：文献レビュー演習		
2.	障害児者のための生活支援学とその実際：文献レビュー演習		
3.	地域住民のための生活支援学とその実際：文献レビュー演習		
4.	地域環境評価：研究レビュー1		
5.	研究レビュー2		
6.	直接的・間接的事業計画：研究レビュー3		
7.	研究レビュー4		
8.	個別・集団支援プログラム：研究レビュー5		
9.	研究レビュー6		
10.	病気・障害のある高齢者の地域生活支援プログラム：研究レビュー7		
11.	研究レビュー8		
12.	認知症の予防、地域生活定着プログラム：研究レビュー9		
13.	障害児者の地域生活支援プログラム：研究レビュー10		
14.	研究レビュー11		
15.	難病者の地域生活支援プログラム：研究レビュー12		
成 績 評 価 の 方 法 【評価項目と割合】			
演習ワークシート	研究レビューの準備と討議内容		
50%	50%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
準備学習：研究レビューは原則として自己検索して準部する。 事後学習：研究レビューの内容を演習ワークシートとして提出する。			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
※その他欄参照			
参 考 書 又 は 参 考 資 料 等			
・地域保健関係の各種の研究報告書、行政事業レポート等から紹介します。			
そ の 他（受講生への要望等）			
※テキストについては、配布資料と研究レビュー用の文献などを使用し、随時、関連参考書を紹介します。 ・小グループで討議した内容をまとめて、演習ワークシートを作成していくので、主体的参加、主体的学修を期待します。			
担 当 教 員 の 連 絡 先 等			
担当教員 E-mail	その他		
ohmaru@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名		環境健康生活特論 I	
担 当 者 名		奥村 千カ子	
科 目 コ ー ド	1900035	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	機能障害が生活障害としてどのように現れるかは帰属する文化や社会システムにより大きく異なる。多様な生活環境のなかで健康生活を獲得・維持していくための支援の在り方を理解する。学生との協議の中からテーマの絞り込みを行って検討し理解を深めて、具体的な解決策を企画する力を高める。		
授業の到達目標	自身の地域社会の文化を理解することからその多様性を知り、障がい者の生活権・交通権等に代表されるノーマライゼーションへの理解を深める。		
授 業 計 画			
1.	総論		
2.	生活文化の地域特性		
3.	多様な海外の生活文化		
4.	地域社会の特性による機能障害と生活障害の関係		
5.	テーマ選択のための検討		
6.	心身機能面の課題背景分析		
7.	心身機能面の課題の理解		
8.	心身機能面の課題解決の企画		
9.	自由と介護分野の課題背景の分析		
10.	自由と介護 介護者の状況理解		
11.	自由と介護 拘束の問題分析		
12.	自由と介護 拘束の問題解決への企画		
13.	ADA の課題		
14.	バリアフリーと UD		
15.	生活と道具・環境と社会システム理解の総括		
成 績 評 価 の 方 法 [評価項目と割合]			
レポート	授業への取組み姿勢		
70%	30%		
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
・ 討議に備えて事前の検討事後の学習を必要とする。			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
・ 適宜資料配付する。			
参 考 書 又 は 参 考 資 料 等			
特になし			
そ の 他 (受 講 生 へ の 要 望 等)			
※成績評価については、議論に主体的に参加して、問題点の指摘と自ら提案する姿勢を評価する。 ・ 課題に対して自ら調査、検討して提案して積極的に議論に主体的に参加することを希望する。 ・ 提出レポートはこちらから指定する用紙を使用する場合以外は A4 に限る。			
担 当 教 員 の 連 絡 先 等			
担当教員 E-mail	その他		
okumura@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名		環境健康生活特論 II	
担 当 者 名		奥村 千カ子	
科 目 コ ー ド	1900036	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	1	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	障害者や高齢者の生活環境について、在宅生活を支える様々な社会サービスを理解するとともに、住環境整備に関する法的制度(介護保険制度)、障害者や高齢者の身体的特性の理解、疾病別・障害別の住環境整備の在り方を学ぶ。住環境整備の基本技術として、住宅改修や福祉用具の活用などを学ぶ。演習として、自作可能な介護用品の作製を行う。また、海外の福祉事情と対比して我が国の福祉について検討する。		
授業の到達目標	障害者や高齢者の在宅生活の実情を理解し、住環境整備の必要性を学ぶ。福祉用具の製作を通して身体機能に応じた福祉用具の在り方を考える。また、我が国と外国との福祉施策を対比する中より、今後の高齢社会における取り組みを考える。		
授 業 計 画			
1.	オリエンテーション		
2.	福祉用具の紹介		
3.	介護用品の製作①		
4.	介護用品の製作②		
5.	介護用品の製作③		
6.	介護用品の製作④		
7.	プレゼンテーション		
8.	住宅の見取り図作成①		
9.	住宅の見取り図作成②		
10.	住宅の見取り図作成③		
11.	住宅の見取り図作成④		
12.	プレゼンテーション		
13.	海外の福祉事情 (欧米)		
14.	海外の福祉事情 (アジア)		
15.	プレゼンテーション		
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
※その他欄参照			
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
・プレゼンテーションに対しては入念に準備をして頂きたい。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜資料配付する。			
参考書又は参考資料等			
特になし			
そ の 他 (受講生への要望等)			
※成績評価については、レポート提出およびプレゼンテーションの内容を総合して評価。 ・演習と講義を中心に進める。 ・福祉用具の製作を通して、障害者の生活を理解する。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail		その他	
okumura@knwu.ac.jp			